JLC 第 99 回研究発表会

2024 年 5 月 18 日（土）

日本近代文学館 ＋ ZOOM ハイブリッド 形式

研究発表　豊田一男会員

ジョークの諸相 ③ Tall Tales

[5] Tall tales：「大げさなほら話」絶対に起こりそうもないことを尤もらしく語る。

(1) It was so hot the cows were giving evaporated milk.

あまりの暑さで牝牛たちは濃縮牛乳を出していた。

(2) An invisible car came from nowhere, struck my car and vanished.

見えない車がどこからともなくやって来て、私の車に衝突しそして消えた。

(3) There's a new jet plane so fast that you get in one end of the plane, and by the time you walk to the other end, you're where you wanted to go.

新しいジェット機は非常に速いので、片方の入り口から入ってもう一方の出口まで歩いて行くまでには目的地に着いてしまうほどだ。

(4) Asked how he had managed to raise such fine crops of onions and potatoes during such a dry season, the farmer explained: "I simply planted the two crops in alternate rows. The onions made the potatoes' eyes water, and the moisture kept both crops well irrigated.

こんな乾燥した季節に素晴らしいタマネギとジャガイモをどう工夫して育てたのかと尋ねられて、農夫はこう説明した：「２つの作物をただ１列おきに植えただけさ。タマネギはジャガイモの涙を出させ、その水分が２つの作物が良く灌漑されるようにしたのさ。」

(5) The old-time pitchman was hawking his medicines at a carnival.

"With this hair tonic," he was high-pressuring the crowd, "any man can regrow his lost hair. Why, only this morning I spilled some on this comb, and look —now it's a brush."

昔ながらの行商人がカーニバルで薬を売りつけていた。「このヘアートニックで」と彼は群衆に押し売りしていた。「誰でも失った髪の毛をまた増やせるぞ。いいかね、まさに今朝この櫛に少しこぼしただけで、ほらご覧、もうブラシになってるぞ。」

(6) Two old-timers were talking about the cold winters they had experienced.

"Why, I can remember," said one, "when a sheep, jumping from a hillock into a field, became suddenly frozen on the way, and was suspended in the air like a mass of ice."

"But man," objected the other, "the law of gravity wouldn't allow that."

"I know that," agreed the first, "but the law of gravity was frozen, too."

２人の老人が自分たちの経験した寒い冬について話をしていた。「思い出せるぞ」と一人が言った。「羊が一頭丘から畑へジャンプすると途中で突然凍ってしまい氷の塊のように空中にぶら下がったんだ。」「しかし、君」ともう一人が異義を唱えた。「重力の法則に反するぞ。」「その通りさ」と最初の男が同意した。「しかし重力の法則も凍ったのさ。」

(7) The bikinis on one beach are so alluring that the tide refuses to go out.

海岸のビキニが余りにも魅力的で潮は引くのを拒むほどだ。

(8) “Does it ever rain around here?” a motorist asked a native near the Mojave Desert.

“Rain?” echoed the native. “Say, there’s bullfrogs in this town over five years old that hasn’t learned to swim yet.”

「この辺では雨が降るのかい？」とドライバーはモハヴェ砂漠の近くで土地の人に尋ねた。「雨が降る？」と土地の人は同じ言葉を繰り返した。「この町の５歳以上でまだ泳ぎを覚えていない食用蛙がいるさ。」

(9) The farmer, just back from Kansas, said, “There’ll be a shortage of beef this year. It was so hot out there, the corn popped in the fields, the cows saw it and thought it was snow—and they froze to death.”

カンザスから帰ってきたばかりの農夫が言った「今年は牛肉が不足するだろう。向こうはあんまり暑いからトウモロコシが畑で弾け、乳牛たちがそれを見て雪だと思い、そして凍え死んだんだ。」

(10) A carpenter who was shingling a house in a thick fog kept on working steadily. When the fog lifted, he discovered he had shingled ten feet beyond the roof of the house.

大工は濃い霧の中で家の屋根板を懸命に葺いていた。霧が晴れると、彼は家の屋根の 10 フィート向こうを葺いていたことに気が付いた。

(11) In Texas, a baby was born so big, it was impossible for his parents to name him all at once.

テキサスでは赤ん坊が余りにも大きく生まれるので、両親は彼の名前を一度につけることが不可能だった。

(12) The menu in the French restaurant was so complicated that the patrons had to bring a translator when they dined there.

そのフランス料理店のメニューはあまりにも複雑だったので店の常連客は食事をするとき通訳を連れてこなければならなかった。

(13) The man was so rich that he went out and bought a college for his son to attend.

その男はあまりにも金持ちだったので出かけて行って息子が通う大学を買ってしまった。

(14) The train engineer got so lost, he took a left turn where there weren’t any tracks.

列車の運転手はあまりにも取り乱してしまい線路のないところで左に曲がってしまった。

(15) The bank guard was so mean, he arrested people for withdrawing their own money.

その銀行の警備員はあまりに意地悪だったので人々が自分たち自身の金を引き出したと逮捕してしまった。

(16) There was a man in Paris who has managed to live so fast that he is now older than his father.

パリのある男は何とかして早く生きようとして今や父親より年上になっている。

(17) The carpet was so thick that several grass snakes lived in it and no one knew about it.

カーペットはあまりに厚かったので数匹の蛇がその中に住みそしてだれもそれを知らなかった。

(18) The druggist was so greedy that he sold pills to help people get over the shock of paying for their bills.

薬剤師は非常に強欲で人々が薬の勘定を払うショックを克服する助けとなるように錠剤を売りつけた。

(19) The speaker was a wheat farmer who never ran out of tall talk. “I don’t know how many bushels we raised this year,” he said, “but my men stacked all they could out of doors, and then stored the rest of the crop in the barn.”

話し手は小麦農場主でほら話が尽きることがなかった。「今年何ブッシェル育てたかわからない」と彼は言った。「しかし、男たちは外で積み重ねることができる限り積み重ね、それから穀物の残りを納屋にしまっておいたんだ」と言った。

(20) During a dust storm in Oklahoma, a prairie dog was seen 100 feet in the air, burrowing.

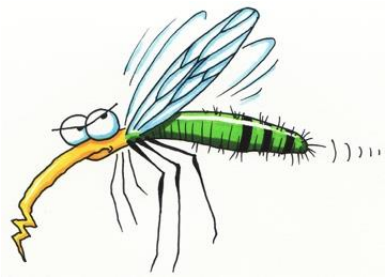
オクラホマの土ほこりの間、プレーリードッグが穴を掘って 100 フィート空中にいるのが見られた。

(21) A couple of mosquitoes, each over six feet tall, were discussing a man they were about to attack.

“Shall we eat him here or carry him home?” asked one.

“Let’s eat him here,” said the other. “If we carry him home the big mosquitoes will take him away from us.”

二匹の蚊はそれぞれ 6 フィート以上の背丈で、彼らが攻撃しようとしている男について議論していた。「彼をここで食おうか家へ持って帰ろうか」と一匹が言った。「ここで食おう」ともう一匹が言った。「もし家へ持って帰ったら、大きな蚊が俺たちから持って行っちまうぞ。」



(22) A recent story told about a Canadian trapper who lost his dental plates during a long trek in the woods. So he shot a deer, glued its molars together with household cement, stuck them in his mouth, and then ate the animal with its own teeth.

最近の話で、わな猟師が森の中での長いトレッキング（徒歩旅行）の間に義歯をなくしてしまった。そこで、彼は鹿を撃ち自家製のセメントでその臼歯を接着し、口の中にくっつけ、それからその動物をその動物自身の歯で食べた。

(23) A nineteenth century explorer was telling about an exciting experience in Alaska. His sleigh was pursued over the frozen wastes by a pack of a dozen famished wolves. He took aim and shot the foremost one, and the others stopped to devour it. But they soon caught up with him, and he shot another, which was in turn devoured. This was repeated until the last famished wolf was almost upon him.

“Say,” broke in one of the listeners, “according to your story the last famished wolf must have had the other eleven inside of him.”

“Well, come to think of it,” said the story teller, “maybe he wasn’t so famished after all.”

19 世紀の探検家がアラスカでのワクワクするような経験を語っていた。彼のそりは 12 頭の飢えた狼に凍てついた氷原を追われた。彼は狙いを定め先頭の狼を撃つと、他の狼たちは今度はそれをむさぼり食った。しかし狼たちはすぐに彼に追いつき、彼がもう一頭を撃つと今度はそれが食われてしまった。これは最後の飢えた狼がほとんど彼に襲いかかるまで繰り返された。「おい」と聞き手の一人が口をはさんだ。「君の話によれば、最後の飢えた狼はほかの 11 匹を飲み込んでしまったに違いないな。」「うん、そういえば」と話し手が言った。「たぶんあの狼はそれほど飢えていなかったんだろうよ。」

［参考］　日本の Tall Tale：　落語「あたま山」

ごくケチな男がさくらんぼを食べたあと、口の中に残ったタネを、もったいないってんで飲み込んでしまった。なにしろ人の身体は温かいし、水気にもこと欠かないから、しばらくすると腹の中でこの種が芽を出した。だんだん育って木になったかと思うと、ぐんぐん伸びて頭を突き破り、しまいには枝を拡げて桜の大木になった。

やがて春が訪れ、この木に花が咲くと、「あたま山の桜」と呼ばれて、世間で大評判になった。そうなると近郷近在から大勢の人が花見に押しかける。男の頭の上で飲めや歌えの大騒ぎだ。

昼間だけならまだ良かったが、夜桜としゃれこむ人が出てくるようになると、一日じゅう頭の上に人が絶えない。静かに見物してくれるならまだいいのだが、人出が多くなるにつれて、迷子になって泣き出す子供は出る、酔っ払って喧嘩を始める奴が出る、とうとう幹に立ち小便をする者まで出てきた。これではいくらなんでも我慢がならない。

そもそも頭の上に木があるから悪いのだ。こんなものは抜いてしまえばいい。それには頭の上の人たちに立ち退いてもらわなければならないが、と男はおもむろに頭を左右に振り始める。

花見客は「それっ、地震だ」ってんで、蜘蛛の子を散らすように逃げ出し、頭の上には人っ子ひとりいなくなった。そこでやおら桜の木に手をかけ、思い切ってグッと引き抜いた。あたまの真ん中におおきな窪みができてしまったが、これで夜はぐっすり眠れるようになるのだから、ひと安心だ。

さて、この男がしばらくして用足しのために外出すると、帰り途で夕立に遭った。家に戻るころには、頭の上の窪みに水がたまって池ができている。すぐに捨ててしまえばいいものを、なにしろ根がケチだから、雨でもなんでも自分の身についたものを捨てるということができない。

そうこうするうちに、ダボハゼだのフナだのドジョウだのが湧き始め、それを目当てにこんどは子供が釣りにやってくるようになった。糸が切れたと言っては泣き、隣の子と糸が絡んだといっては喧嘩をするというわけで、またしても頭の上が煩わしくて仕方がない。子供が帰ったかと思うと、芸者や幇間を引き連れて賑やかに舟遊びをする奴がある、網打ちをする奴があるというわけで、今度もまた眠れなくなってしまった。

これではとてもたまらない。すっかり気が滅入ってしまった男は、世をはかなんで自分の頭の池へ身を投げた。

（十一代目　金原亭馬生（監修）（2006）『面白いほどよくわかる　落語の名作 100』（日本文芸社）

We, Jokers

英語のジョークを楽しむ会

(Joke-Loving Club) 会報 第 99 号

発行日：2024 年 5 月 18 日

発行人：世話人代表　豊田一男

編集人：小澤正樹

発行元：英語のジョークを楽しむ会

問い合わせ先: j2d4vhb7@na.commufa.jp